新座二中の生徒自殺問題

市議が学校を調査へ

生徒のカウンセリングも開始

新座市立第二中学校（阿部哲生校長）二年の大貫陵平君＝当時（14）＝が昨年九月、菓子を校内で食べたことを注意され、自宅マンションから飛び降り自殺した問題をめぐり、同市の市議らが直接、同校に調査に入ることを二十三日までに決めた。市教委と協議した上、今週にもスタートさせる。一方、陵平君と一緒に菓子を食べ、学校から指導を受けた生徒らへのカウンセリングを、市民オンブズマンが独自に始めた。さらに二十日には保護者グループが学校の指導法などを話し合う二回目の集会を開いた。陵平君の自殺から五カ月。その死の背景や周辺にある問題を改めて見つめ直す動きが、活発化している。

同校の調査は、田中幸弘氏（社民）ら二人の市議が行う。田中市議らは昨年十二月の同市議会で、自殺問題に関する調査の実態を質問。市教委側が「（菓子を食べ、指導を受けた残りの二十人の）生徒らから話は直接聞いていない」と説明したことから、調査に乗り出すことにしたという。

田中市議らが懸念しているのは、同級生の自殺に対し、精神的なダメージを受けやすい年代である生徒らへのケアが十分に行われていない点。田中市議は「生徒の自殺につながるような管理教育のひずみは、学校内では気づきにくいのでは。第三者の立場から現場の教諭らと意見を交わすことで、この問題を正面からとらえ直すことができれば」としている。

一方、教育問題に取り組む市民オンブズマンの一人で、市内でフリースクールを経営する斎藤宗夫さん（20）は今年初めから、事件にかかわった同級生らへのカウンセリングを始めた。

斎藤さんは、大学などでカウンセリング技術を習得。フリースクールに通う生徒らを通じて陵平君の同級生らと知り合い、そのうちの一人に今月十四日、約一時間にわたってカウンセリングを行った。

「自殺について触れまいとする教師らに対し、この同級生は仲間の存在が消し去られるようで強い反発を感じていた」と斎藤さん。「話をしたいという生徒がいる限り、カウンセリングを続けたい」という。

また、二十日には同校の保護者グループ「命の応援団」（小松とし子代表）が昨年十一月に続いて二回目の集会を同市内で開催。六十人以上が参加し、活発に意見を交わした。

陵平君の母親の政江さん（48）が「おかしいと感じたことを口に出せず、息子の命を守れなかったのはこの私です。陵平が残した『宿題』を一つ一つ解いていきたい」と涙ながらに語った。これに対し、「子供だったころ、教師からのプレッシャーで自分も自殺を考えたことがあった」、「生徒を失った先生たちこそつらい思いのはず」などの意見が出された。

二月十七日には三回目の集会が予定されている。

保護者グループの集会に参加し、自らの経験を涙ながらに話す、自殺した大貫陵平君の母親の政江さん

＝20日、新座市東